ビルマ語史と方言に関する簡単な記述があるのは，従来の「入門書」，「概説書」にない新しい行き方として注目される。全体としてきわめて要領よくまとめられており，ビルマ語学習の参考書として，その利用価値は高い。

元来，文法書は，その言語を捕えるための「網」のようなものであるが，その際，網の目の粗密が問題となる。いわゆる入門書，概説書として突込み方が不足なのは止むを得ないが，文法書としての本書の網の目が粗い点には，やはり不満が残る。この事は，特に4と5について言い得る。

又，ビルマ語史の説明で mye<土>pye: <走る>に対する古代語形として，夫々 mle, ple という例が挙げられているが，十二，三世紀頃の碑文には mliy, pliy という形が残されているのであるから，それを掲げるべきであろう。

音韻論は，Robert Jones, William Cornyn, R.I. Mcdavid 等アメリカの学者の「音素体系」とは幾分異なっており，J.A. Stewart, R.K. Sprigg 等英国の学者の体系に近い。この点では，私達の感じともよく合う。

ビルマ語は，多音節語の場合，先行音節の末尾音が有声音であれば，次続音節の語頭子音が有声化し，声門閉鎖音であれば無声化するのが原則であるが，例文中，相当の混乱が目につくのは遺憾である。Allophoneや，Allomorpheの概念が曖昧なためであろう。十七頁にある子音の内，ɵ は θ の allo-phone として取扱うのが妥当と思う。

巻末の文献目録は，役に立つ。但し，日本語による唯一の参考書として，五十嵐智昭「ビルマ語文法」がとりあげられているけれども，これは Judson「A Grammar of the Bnrmese Ianguage」の翻訳にすぎず，独創性や実用価値の点からいえば，原田正春「ビルマ語入門」1958の方が，はるかに優れている。

（大野　徹）

S.V. Nievyerob, U: Maun Maun jɔ *myan ma-ru.ša*: *zaga*: *Pyɔ*: *Saou*? Moscow 1961 pp.327.

本書は，はしがきにおいて著者が述べているように「ロシア語を知らないビルマ人がソ連を訪れる場合に使ってもらう」事を意図して作成されたポケット版のロシア語日常会話書である。

始めに，ロシア文字とその発音の説明があり，次いで本論となっている。本論は，一般編と具体編とに大別され，前者には，挨拶，感謝，要求，同意，拒否，失望等14の簡単な表現の型と，気候，月日，時間，数，金銭，色等に関する単語が例示されており，後者には，1. 市中 2. 交通 3. 買物 4. 娯楽 5. 治療 6. 工場 7. 集団農場 8. 保養 9. スポーツ 10. 新聞雑誌 11. ラジオ・テレビ 12. 税関というように，実際の場において話されると想像される会話の例が掲げられている。

これだけ見れば，一応便利な，会話書として有益な本だという印象を受けるが，現実にその利用価値がどの程度あるのかは疑わしい。いわゆる「二言語対訳」会話書の欠陥が，この本にもはっきりと表われていて，いかなる外国語を学ぶ場合にも，初心者にとっての速成法はあり得ないという事を感じさせる。しかし，この本も使いようによっては，その価値を充分に発揮し得る。例えば，Native Speaker の指導，或いは，テープレコーダーの利用等によって反復練習を重ねるならば，相当な効果を期待する事ができるし，又，ロシア語の基礎を一通り学んだ後で用いるとすれば，その実用的価値が一層高まる事は疑いない。

ポケット版会話書として止むを得ないとは思うが，発音の説明にビルマ文字が用いられている事は感心できない。元来，ビルマ語とは音韻体系の異なるロシア語を，ビルマ文字で表記する事自体が，既に無理である。そのため，ビルマ語にはない音を表わすのに相当苦労したらしい跡が認められる。例えば，ロシア文字 ц に対するビルマ文字 ta-sɛ の二文字重ね表記等。且て私は，どうしても日本語のツを発音できないビルマ人に，ビルマ文字 ta-su 二文字の Super-script を用いて説明した経験がある。ビルマ語では，二音節語の第一音節の母音が中舌母音 [ə] に変る傾向が強く，極端な場合には，母音が脱落して了う事さえある。この事から，ロシア文字 ц に対するビルマ文字 ta-sɛ の super-script は，効果的と言えよう。

（大野　徹）